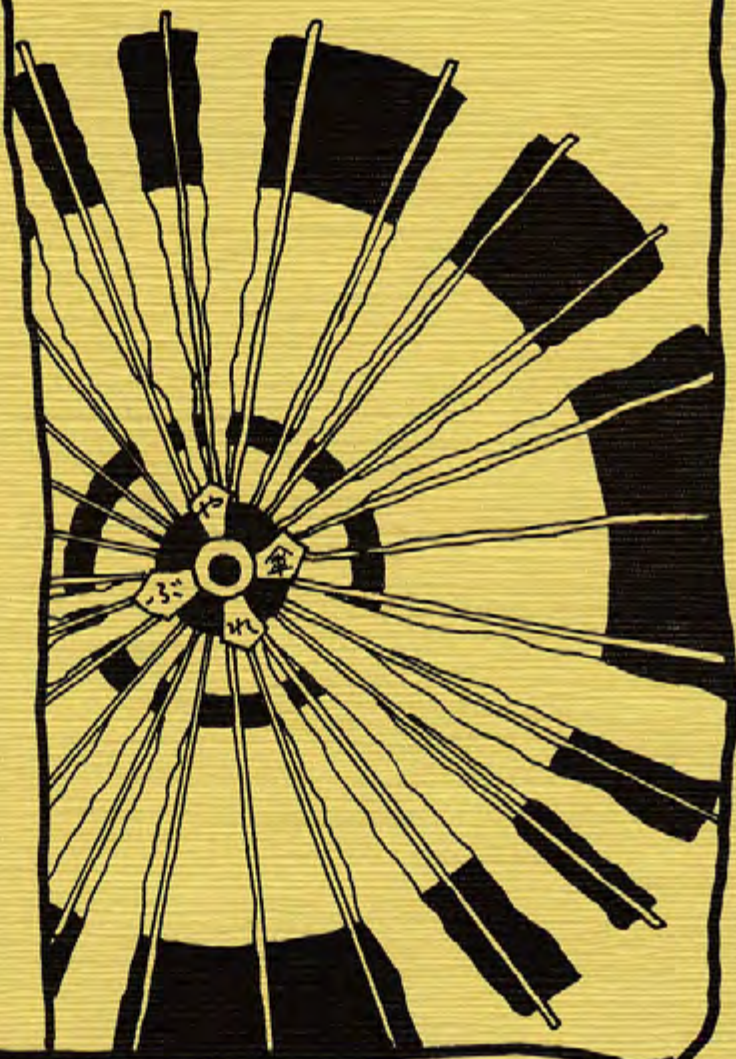


# やぶれ傘



一〇二号

二〇二八年四月

|                   |              |              |               |              |                |            |               |            |                 |               |                |              |                |
|-------------------|--------------|--------------|---------------|--------------|----------------|------------|---------------|------------|-----------------|---------------|----------------|--------------|----------------|
| 春の日に泣きわめく子の「我在り」と | 城跡の眼下にひらけ春の湖 | 牛小屋の屋根に烏が春の昼 | 下萌や目玉ばかりの稚魚の群 | 花疲れいも羊羹を口にする | しばらくは硝子戸越しの蝶の昼 | 春の昼広口瓶に飴色々 | 土筆摘む十本までは数へつつ | 暖かし社殿の右の力石 | くさり付きコップで受ける春の水 | 舟あまた湖面に花の塵あまた | タクシーが露地よりぬつと鳥曇 | 駐車場の出入口口花はこべ | 畑みちはすこしのほりに蝶の昼 |
| 松村光典              | 秋山信行         | 天野美登里        | 有賀昌子          | 白石正躬         | 安藤久美子          | 青谷小枝       | 廣瀬雅男          | 瀬島酒望       | 丑久保勲            | 藤井美晴          | 大島英昭           | きくちきみえ       | 根橋宏次           |

抄 集 句 傘 ぶ れ や

大崎紀夫選

|                |              |                  |             |               |             |              |              |              |             |                |               |                 |                |             |
|----------------|--------------|------------------|-------------|---------------|-------------|--------------|--------------|--------------|-------------|----------------|---------------|-----------------|----------------|-------------|
| 啓蟄の玻璃に揺れる枝映りけり | 橋脚を水さかのほる里の春 | ひとりこと増えてひとりや日の永し | 春眠や隣家が回す洗濯機 | 駅を出て春三日月を真向ひに | 二坪を耕しをれば土匂ふ | 探梅やいつか重たき靴の泥 | 雪晴れや垂るる雫は何拍子 | 如月の今日は卒寿の誕生日 | 雪残る上に淡雪今朝の道 | 薄氷の結ばれしとも解けしとも | 卒業す筒もてお面小手ありし | カーテンをすばつと開ける雪の朝 | 春めくや先ずは薬缶を磨き上げ | 蛤に乗りしまめ雛段の端 |
| 神山市実           | 黒澤次郎         | 小巻若菜             | 小山陽子        | 齋藤朋子          | 佐藤稻子        | 高橋均          | 貫井照子         | 橋本美代         | 山本久枝        | 浅嶋肇            | 安齋正蔵          | 泉一九             | 岩藤礼子           | 奥田温子        |

着ぶくれて月食の色見とれをり  
 そここから雪割る音の昨日今日  
 残る雪好んで上を歩く犬  
 雪溶けて部に活始まる日曜日  
 啓蟄の玻璃に揺れる枝映りけり  
 店頭で思はずカゴへチューリップ  
 春風にギターを鳴らす男居て

神山市実

故郷の水はゆたかに春隣  
 鶯の高く飛び立つ梅の空  
 梅の木の下で昼餉を老夫婦  
 バス停の傍の花壇にすみれ咲く  
 連翹は小雨の庭に花咲かせ  
 夕暮の庭の花木瓜ほの白く  
 仏像展の薬師如来に風光る

亀岡睦子

上林富子

ペン落す音にも春の近きかな  
寒明くる割りし卵に黄身二つ  
お向かひが建国の日の国旗出す  
梅の花観音堂の真向ひに  
大樹にて白木蓮の花盛り  
風船に八十歳の息を吹く  
ひとときを子の風船と遊びけり

木村瑞枝

風呂吹きに選びし大根俎板に  
水耕の白き根ますぐヒヤシンス  
何となく人に会ひたし浅き春  
雛出す古びし箱に祖父の文字  
耳元でペンペン草を振つてみる  
棕櫚の葉をワサワサ揺らす雪解風  
強東風や若者並ぶラーメン屋

倉澤節子

竹の匙添へて真冬のかき氷  
梅咲いてポップコーンのはじけたる  
ぽろと落つ金目鯛の目うつろなり  
子ども来て雀穩れのすずめ散る  
亀鳴いて応募葉書が期限切れ  
犬小屋に赤い座布団春の雪  
音立てて家壊しをり桜時

黒木東吾

極寒の昼の三日月揺れにけり  
運休に五キロを歩く受験生  
春うらら雲の間に陽の光  
昼下りゆるりゆると春の雲  
照り降りからの傘ひとつ春の町  
交番に届きし財布朧月  
校庭に軌む旗竿春一番

霜柱蹴散らししてある通学路  
橋脚を水さかのぼる里の春  
鳥帰る鯉は川上向きしまま  
犬ふぐり踏んで田に入る測量士  
豆撒きを隣の人に見られけり  
春の川ペットポトルの浮き沈み  
苗札の消えかけてをり木の芽時

黒澤次郎

春眠をひとりむざぼるゴリラかな  
初午の小さき祠と大きき旗  
寺の奥から恋猫のこゑ聞こゆ  
花吹雪学園までと続く道  
突き出しの青鰻の香が鼻に抜け  
身体にもいいからと出す蜆汁  
春雷や動き始めしダンゴムシ

小池一司

小巻若菜

今年またいつもの角に焼芋屋  
眼張煮て器を選ぶ夕餉かな  
ひなまつり歌四番まで歌ひけり  
降り始むる春雨の中ポストまで  
新聞紙にくるまれし独活もらひけり  
角のある豆腐に木の芽味噌をのせ  
ひとりごと増えてひとりや日の永し

小山陽子

軒のなき数メートルを春の雨  
パイの皮ぼろぼろと春兆す  
飼ひ主を犬は見上げて春日向  
春眠や隣家が回す洗濯機  
行きずりの神社でみくじ風光る  
春時雨線路の先の空晴れて  
春昼の大使館へと入る鳩

山笑ふ吃水深く荷舟ゆき  
箒目の雨に崩れし牡丹の芽  
並びたつメタセコイアの芽吹きかな  
芽柳の風のまにまに池の端  
惚の芽の齒ざはりのよし手打そば  
花ミモザ風の強まる午後となり  
駅を出て春三日月を真向ひに

齋藤朋子

走り根に鳩が鳩追ふ小春かな  
注連飾り小町の一首挟み置く  
在所からうからやからへ年の餅  
頬被はらちづし煙草の火を貫ふ  
斑雪広ら告し踏まれる駅広場  
山茶花のこぼれぬるかな  
観梅の筈が寄り道陶器市

佐々木あつ子



佐藤 稻子

ザクザクと踏む樂しさは霜柱  
梅園に尺八の音の流れくる  
二坪を耕しをれば土匂ふ  
千年の愛染桂芽吹きぬて  
庭にある燈籠籠ひとつ藪椿  
神田川の堰の音する春の鴨  
アンコール・ワットの日の出春シヨール

眞田 忠雄

モーツァルトの五臓に滲みる風邪の夜  
悪感来る予感の宵や寒の入り  
迷ひなく湯婆たんぼの夜具に猫は来る  
書初を兎へとポストに投函す  
春潮の渦巻き黒く座喜味城  
話にもならぬ過労や春の雨  
五人目の孫を抱つこし剪定す

柴崎和男

わづかなる蒔すきにも雪は積もりけり  
小便に起きて見入るや雪明り  
死にたしと月に嘯き二月尽  
近頃は富士よく見える実朝忌  
古書店の平台しまふ春霰  
啓蟄の駅前交番ひとけなし  
しら梅や湯島の坂の小料理屋

篠崎志津子

藤の花窓より声のつつぬけに  
神木のを結ぶ藁縄風光る  
境内の土俵にシート春の雨  
春の旅太鼓で時を報せぬる  
諸葛祭気付かぬうちに白髪増し  
濃き色の黄身をごはんに春の朝  
べびーカーに坂で越される梅二月